

1. 実施場所・日 鶴岡市櫛引公民館 2017年3月5日(日) 10時～15時
2. 実施主体 NPO 法人公益のふるさと創り鶴岡、鶴岡市社会福祉協議会
支援 尚綱学院大学エクステンションセンター ボランティアチーム TASKI 2名
(名取市で仮設住宅被災者寄り添い支援活動をしてきた学生)
3. 参加児童数 小学生12名

4. 検証考察

(1) 総括

子ども(小学生)が介護の意味と仕事について、楽しみながら体験的に理解する活動として、今回の「子どもケア・だがしや楽校」は、大きな意義と成果があったと考えられる。

だがしや楽校は、かつての地域社会における放課後の遊びや体験、地域の人々のつながりを通して、子どもも大人も相互に楽しみ、体験的な知見や知恵を育む活動として行われている。本事業は、子どもたちが日常学んでいる学校教育の授業科目の印象も踏襲しながら、それをすべて学校的にはなく、地域生活の様相を取り入れたことによって、介護の本質をより子どもに体験させていくプログラム開発の可能性を見出すことができた。

理学療法士や介護・社会福祉の専門家が、介護の現場の営みを子どもたちにわかりやすく体験的に学ぶ今回の内容であらためてわかったことは、自分の体のしくみを知ること、手助けすること、食べるものをつくること、服を部屋にたたんで整理することなどは、高齢者の介護にだけ必要なことがらではなく、むしろ、子どものうちからだれもが健康な日常社会生活の営みとして身につけておくべき「人間生活学」と総括できる内容であった。老人ホームで健康に生き生きと暮らすためのことがらは、幼稚園・保育園や小学校で子どもたちが健康に生き生きと暮らすためのことがらと本来多くが本質的に一致する内容なのであろう。

それらをさらに、他者を支える、他者を助けるという側面を強調すれば、他者をことばかけと手助けによって支えていくという人間どうしが助け合う行為を総合的に学ぶ「助け合う人間生活の総合学習」ととらえる。これによって、平時は同級生どうしの助け合いの心の醸成、社会生活では困った人や弱者への配慮や手助けなどの延長上に、高齢者への介護があり、その基本的な心構えと技術は、家族や地域生活者がだれでも持ち合う必要があることをあらためてだれもが気づき、理解していくことができると思われる。

その意味でも、今回の事業を、以下のようなさまざまな場面にも広く展開していくことによって、社会福祉の理解を市民に広く啓発することにもなるとともに、地域生活で助け合い・支え合う予防介護の取り組みが一層進展することが期待される。

長寿社会は、現在の高齢者のみが享受するのではなく、むしろ、今は始まろうとしている時代であり、今の子ども世代が将来の長寿社会を担い、生きていくことを考えれば、子どもの時から楽しく体験する介護学習は、かつては子守や高齢者の介護が当たり前であった地域生活の新たな姿として行われていくことがのぞましいと言える。

(2) 今後の発展的展開プログラム例

- ① モデル事業として、特定の市町村自治体教育委員会と連携した「(仮)長寿社会を担う助け合う心の育成プログラム」として複数年事業を実施する。特定実践研究の指定校を選び、今回の事業主体等が実施協力する。
- ② モデル事業として、特定の市町村自治体の中の特定小学校区の小学校と町内会・老人会が、今回の事業主体等が実施協力して行う。小学校と町内会が一体としてモデル事業を行える小規模地域がのぞましい。

(3) 「助け合う人間生活の総合学習」としての今回の介護学習プログラム要素の確認



「仲間づくりとアイスブレイク」

人の動きを知るジェスチャーかるた
他にもいろいろな身体集団ゲーム



「国語の時間」

かつての街頭紙芝居による介護の意味と
福祉の心・助け合う心を題材にした紙芝居



「理科の時間」

理学療法士による人体学習 骨のパズル



「体育の時間」

身体測定



「介護実習」

理学療法士による筋力づくり支援技術。



「家庭科の時間」

介護食、茶碗むしづくり



「家庭科の時間」

服のたたみ方

日常の家庭生活のしかたを学ぶ。

そのほか、「社会の時間」「算数の時間」などに相当するようなさまざまな体験学習の要素とプログラムは、大いに開発されることがうかがえた。



「まとめの時間」

ノートに、行ったこと、わかったことをまとめる時間をとる。

その後、発表会



できあがった茶碗蒸しを食べる。



おみやげとともに修了書を手渡す。

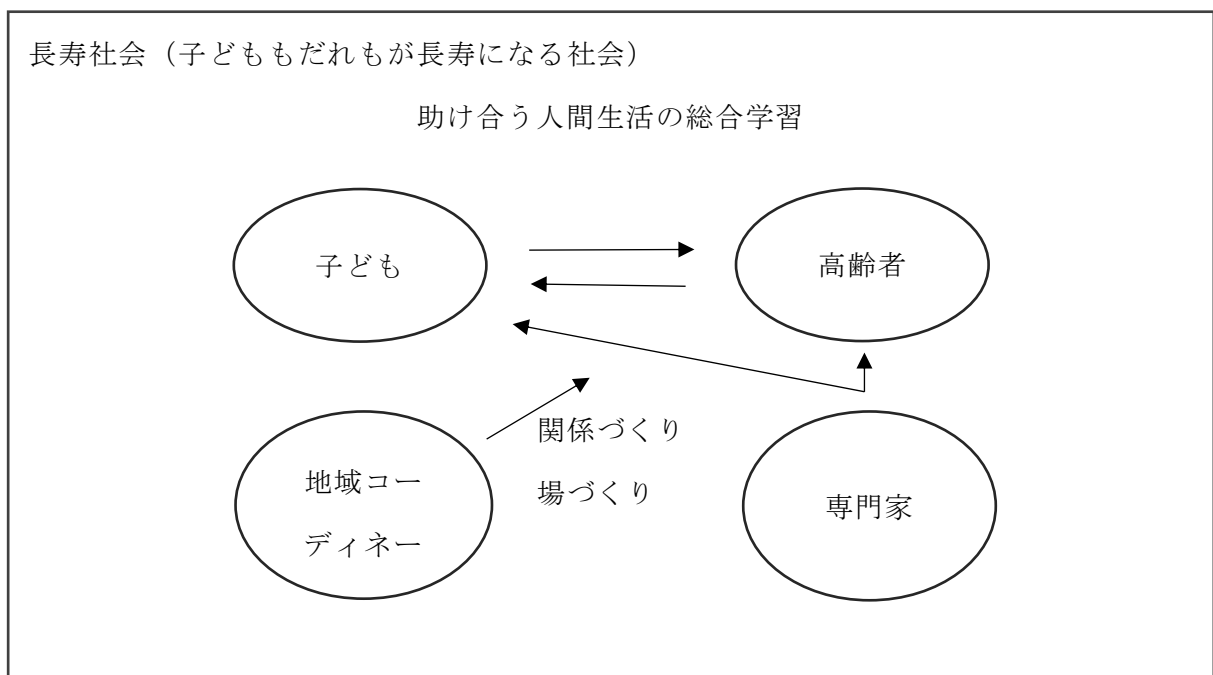
夏休みなどでの複数日によるプログラムとしても有効と思われる。

(4) 展望

今回、小学低学年生の参加が中心だったので、参加者からの直接評価はとれていないが、家庭で保護者に今回の体験をどのように語ったか、家庭生活などでの変容や成果について保護者から聞き取る手立ても考えられる。

今後、元気な地域高齢者もいっしょに参加し、子ども（孫世代）・地域生活の高齢者と介護専門家と地域生活支援者や大学生等のサポーター（子どもと高齢者と専門家をつなぐコーディネーター、これからの地域生活コーディネーター像）が一体になった「長寿社会の老若協働参画事業」として行うことがより効果を高めていくと考えられる。

子どもと高齢者がともにすることにより、子どもが高齢者から癒やしを得て、高齢者が子どもから元気をもらう互惠関係を醸成して「老若共同参画社会」をつくる提案は、『輪読会版・駄菓子屋楽校』（拙者、新評論、2008）に示した。



「地域コーディネーター」は、文部科学省で学校（子どもの教育）と地域をつなぐコーディネーターとしても示されているが、高齢者の地域福祉の立場からも求められる。